

# Newtonの橋

北海道大学 中村 郁

2000年の4月22, 23日北海道大学の滝セミナーハウスで数学科の新入生の研修がありました。ちょうど有珠山が噴火を始めた頃です。滝では頼まれて Newton の話をしました。頼まれたのは、その前年私が「数学史をひもとく」という講義をしたためだったようです。ところで、Newton と言えば Cambridge, Trinity college. そう言えば Trinity college には一度行ったことがあります。もう20年も前になります。1981年11月の初め、ボンから鉄道でルクセンブルグを経由、ベルギーのオストエンデから列車ごと船に乗ってロンドンへ渡る、という旅でした。Newton の話のついでにその思い出話もしました。今日はそれを書きます。

Cambridge では Trinity college の一角にあるゲストルームに泊まりました。ふるい建物ですが広さだけはたっぷりあって快適でした。ここに泊まっている間は朝食はいつも年とった給仕が運んでくれました。

「Good morning, Sir」

私は生まれて初めて「Sir」と呼び掛けられました。私は「Sir」を反射的に「閣下」と翻訳したので、内心「エッ」と思ったのですが、その後イギリス国内で買い物に行くと、年とった店員や警官がこちらに話し掛けるときは、「Can I help you, Sir?」ですから、実は何でもないことなのでした。

Trinity college では夕食はカレッジの食堂に行きます。ここは学生と教官の座席が別れています。それどころか、教官の席は一段と高いところ(High Tableという)で、段差は20-30cmあります。ここを訪問した私の知り合いは、「学生が見下ろせて気分がいい」と、これが大層気に入ったようでした。段差も随分あったようで、私は劇場のステージくらい高いのかと思って聞いていましたが、実物を見て拍子抜けしました。せいぜい階段一段分の差というところですが、でも段差が50cmのカレッジもあるそうですから、おなじCambridgeでもカレッジによって違うようです。教官の特権的な地位を印象付けるという理由で、新しいカレッジではこういう段差はもう無いという話も聞きました。

教官の多くは夕食後は2階に上がってワインを飲みながら歓談します。私は座ってわからない話を聞いていましたが、話題はCambridgeの数学の教授 Swinnerton-Dyer さんがした選挙の応援演説のはなしでした。その時、肩口からだれか話し掛けてきます。

「Sir, please」

若い給仕がお盆にのせたチョコレートを「ひとつとれ」というのです。今度はチョコレートをひとりずつ勤めていく給仕がいるのに驚きました。

Trinity college に泊まっているとき、私を招いてくれた Wilson さんの居室に案内されたことがあります。広い部屋にステレオと数学の本が並んでいました。カレッジの教官用の居室はカレッジの南の入り口から南東側に連なる棟にあります。その棟がつきると北に折れて、それはチャペルに続きます。このチャペルにはNewtonの大きな立像があります。ある晩楽器の演奏が聞こえるので探してみると、チャペルでカレッジのオーケストラが練習しているところでした。Newtonはやっぱり気難しい顔をして立っていました。

Wilsonさんの部屋は南の入り口の最初の部屋だったように思います。彼は東斜め上の天井を指差して、「この上の部屋にNewtonとRutherfordがいたのだ」と教えてくれました。Trinity collegeの住人の正式な記録はないようですが、有名な光学実験に関するNewton自身の記録と当時の太陽光線の入射角を計算した結果「Newtonの部屋はカレッジの南側の2階だった」と推定されています。(岩波新書『ニュートン』)それがWilsonさんの部屋の上だったというわけです。NewtonとRutherfordの部屋が同じだったというのも初耳でした。もちろん時期は違いますが。

Newtonの部屋の南側の小さな庭に小さいリンゴの木が立っています。とてもリンゴの実がなりそうもない貧弱な木ですが、Wilsonさんはニヤニヤしながら「これがそのリンゴの木だ」と言うのでした。

Cambridgeのキャンパスに立つと、広い緑の平原が続くその向こうにカレッジや教会の建物が並ぶのが見えます。それは大変美しい眺めです。日本で並ぶものと言えば、北海道大学くらいしか思い当たりません。

「なぜCambridgeというのか知っていますか？」Wilsonさんはこう質問すると、すぐその理由を説明してくれました。キャンパスの平原をそれ程大きくない川が流れています。その川Cam川に架かる橋、それがCambridgeの名の由来なのだそうです。Trinity collegeの裏手をCam川沿いに歩くとまもなく、幅2mほどの木製の橋があります。新調したばかりのその橋は、朱色の大きな鉄のボルトとナットで固定されていました。

「この木製の橋は『数学の橋』と呼ばれていて、もともとは工作好きのNewtonが作ったのだそうです。作った当時はボルトとナットはなかったのですが、ある時カレッジのひとがどうして釘を使わずに橋ができるのか、不思議に思ってこの橋を分解したのだそうです。ところがやっぱり分からなくて、諦めて元に戻そうと思ったけれど、それもできなくなってしまって、それで現在の橋はボルトとナットでとめてあるのだそうです。」

Wilsonさんはまたもやニヤニヤしながらこう話してくれました。